

英仏美術館コレクションによる

ミレーから印象派への流れ

De Millet Aux Impressionnistes

2020年12月19日—2021年1月24日	横浜・そごう美術館
2021年2月6日—2021年5月10日	長崎・パレスハウステンボス美術館
2021年5月22日—2021年7月19日	愛媛県美術館
2021年7月30日—2021年8月29日	金沢21世紀美術館
2021年9月5日—2021年10月21日	岐阜県美術館

ミレー、コローら自然主義や写実主義の画家から、モネ、ルノワール、セザンヌなどの印象派やポスト印象派を経て、ボナール、ドニ、セリュジエらのナビ派へといたる19世紀フランス絵画の系譜を辿る企画。イギリスのウェールズ国立美術館、フランスのトマ＝アンリ美術館、ドゥエ美術館、カンペール美術館の珠玉のコレクションで、百花繚乱に咲き誇ったフランス近代絵画の粋を紹介する。モネの《睡蓮》やヴェネツィア風景などの印象派の名画、早世した妻の姿を描いた肖像画をはじめ7点におよぶミレーの作品などバルビゾン派の傑作、ナビ派の名作で構成される。コロナ禍において、海外の美術館コレクションによる特別展の開催はきわめて貴重な機会である。

コロナ禍では美術展が軒並み中止や延期に追い込まれるなか、企画のあり方や今後の取り組みなどが問い直されているが、幾つかの海外企画では前例のない新しい取り組みがなされている。そのひとつが作品随員(クーリエ)を派遣する人的移動を回避して、海外から作品だけを輸送し、フランスの美術館関係者などが現地からリモートワークで作品の点検や展示設営に携わる手法であり、コロナ禍における海外企画の方向性を示すものとなった。コロナ禍は全ての局面において、これまでのやり方を根底から見つめ直して、新しいアプローチやビジョンを模索することを我々に迫ってくる。

近代絵画のあけぼのーバルビゾン派、印象派、ナビ派をめぐる旅

村上 哲

アート・キュレーション代表

19世紀のフランスでは、産業革命やパリ大改造を経て都市の近代化が進み、ブルジョワ階級による市民社会が形成された。自然科学が発展したこの時代、芸術の分野にも実証主義的な精神が広がり、文学や絵画などに自然主義やリアリズムの動向が登場する。コローやクールベをはじめ多くの画家たちが身の周りの自然や生活を描き、森林や田園、海辺、都市が制作の舞台となった。またバルビゾン派を代表するジャン＝フランソワ・ミレーは、農民の主題にその生涯を捧げている。

19世紀の中頃にチューブ入りの絵具が発明され、画家たちは戸外の光のもとで制作できるようになった。ブーダンやヨンキントなど外光派の活動を経て、モネやルノワールら光と色彩を追求した印象派の画家たちが登場し、絵画に革新をもたらしている。また印象派と行動をともにしたセザンヌは、のちに独自の斬新な作風を築いた。

そして印象主義のスタイルが広く普及した1880年代以降、ポスト印象主義の時代に絵画は多彩な広がりを見せる。ブルターニュ地方を創作の舞台としたポン＝タヴェン派や、セリュジエ、ドニ、ボナールらが結成したナビ派は、絵画を新しい地平へと導き20世紀美術への道を開いている。このたびの展覧会では、自然主義や写実主義から印象派やポスト印象派を経て、ナビ派へといたる19世紀のフランス絵画の系譜を、フランスとイギリスの美術館から出品された珠玉のコレクションを中心に辿る。

監修者として図録に執筆した総論「バルビゾン派、印象派、ナビ派をめぐる旅ー19世紀フランス絵画の眺望」では、①自然主義とリアリズムーバルビゾン派と風景画の系譜、②外光派から印象派へー光と色彩の解放、③ポン＝タヴェン派からナビ派へーポスト印象主義の新局面という全3章で、近代フランス絵画の動向を、フランス社会の近代化やチューブ絵具など新しい画材の発明、色彩論の発達など、絵画のモダニズムが形成された時代背景を踏まえて紹介している。

展覧会では、葛飾北斎や歌川広重ら日本の浮世絵版画の造形観が、ミレーなどのバルビゾン派やモネ、セザンヌなどの印象派・ポスト印象派に影響を及ぼしたジャポニスムの動向を見てとることもできる。モネをはじめとする印象派が浮世絵から影響を受けたことはよく知られているが、その前の世代のミレーやコローなども浮世絵から大きな刺激を受けている。とりわけ1867年の第2回パリ万国博覧会で本格的に日本美術が紹介されて以降、その影響のもとにフランスの絵画は大きく変貌していった。ミレーの晩年にかけての風景画や農民画には葛飾北斎や歌川広重、鈴木春信など江戸時代の浮世絵師の影響が窺われる。ミレーは1860年代の前半からすでに浮世絵版画の収集を始めており、数多くの浮世絵版画のコレクションを所有していた。モネも少年期の

1856年に港町のル・アーヴルで浮世絵版画に出会ったと語っており、1871年からは本格的に浮世絵版画を収集し始めている。彼らが成し遂げた絵画芸術の変革の背景には、北斎や広重に代表される日本の浮世絵版画から受けたはかりしれない示唆がある。この展覧会では、ミレーからモネを経てナビ派へと続くフランス絵画の系譜の奥底に深く流れる、日仏の美意識の邂逅と融合を感じとることができる。

23歳の若さで亡くなった最初の妻ポーリーヌの姿。1840年、パリからシェルブールに帰ったミレーは、1841年11月に洋服仕立屋の娘だったポーリーヌと結婚し、肖像画家としてシェルブールの社交界で名声を得た。1842年、妻を伴って再びパリに出たがサロンでの落選が続き、貧困の生活で結核を患ったポーリーヌは、1844年4月にこの世を去っている。柔らかなコットンの部屋着を身に纏ったポーリーヌは、黒と青が表裏になった絹のショールや赤いターバンを装う。細部に行き渡る繊細な描写には、17世紀オランダ絵画への傾倒、とりわけレンブラントへの憧憬が窺える。病に冒されながらも懸命に生きる儚くも美しい姿を、慈しみの眼差しで捉えたミレーの肖像画の白眉である。



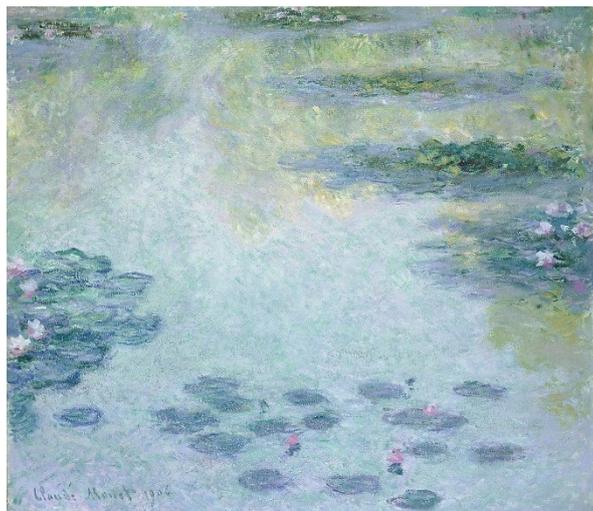
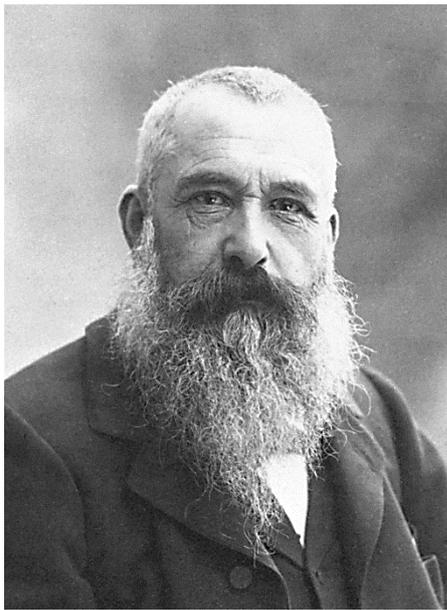
◆ジャン=フランソワ・ミレー 《部屋着姿のポーリーヌ・オノ》

1843-1844年 油彩・カンヴァス 100.2×81.2cm

トマ=アンリ美術館(フランス/シェルブール)

©Musée Thomas Henry-Cherbourg-en-Cotentin

1883年の春、パリの北西80kmのジヴェルニーの村に移り住んだモネは、1890年に地所を購入し、1893年にはエプト川の支流のリュ川から水を引いた「水の庭」を造成して、日本から取り寄せた睡蓮を浮かべた。1895年、この水庭を描き始めたモネは、1898年からは本格的に睡蓮の連作に取り組んでいる。青く染みわたる清澄な色調には、浮世絵版木の紺青の重ね刷りの鮮烈さから受けた示唆も窺える。睡蓮の最初のシリーズは1900年の秋にデュラン＝リュエル画廊で展示され、同画廊の1909年の個展では48点もの大量の作品が「睡蓮、水の風景の連作」として披露された。1914年からは部屋全体を睡蓮で囲む大壁画に取り組むなど、この花は30年間にわたってモネのライトモチーフとなった。



◆クロード・モネ 《睡蓮》

1906年 油彩・カンヴァス 78.7×88.9cm

ウェールズ国立美術館

©Amgueddfa Cymru-National Museum Wales

村上 哲／むらかみさとし

1957年、熊本県出身。東京藝術大学卒業。熊本県立美術館学芸課長を経て2018年から現職。海外展の企画統括・監修に携わる。専門は比較芸術学、エコール・ド・パリ研究、ミュージオロジー(美術館運営学)。現在、熊本県美術家連盟理論部門委員、崇城大学芸術学部学芸員課程講師。